目次

Ⅰ 恋愛表象論

戸をめぐる表現 …… 三

呼応する歌 ――旅生活における問答歌―― …… 二二

Ⅱ 歌垣論 中国少数民族白族の歌垣世界から

何故歌うのか ――中国少数民族歌垣の事例から―― …… 四九

歌垣の歌の論理 ――中国少数民族白族の歌垣を参考に―― …… 七一

Ⅲ 神話表象論

「黄泉国訪問神話」論 ――イザナキの悲哀の仕事―― …… 一〇一

神話の中の身体（からだ） …… 一一八

Ⅳ 記紀論

迷走する『古事記』 ――古事記序文「上古の時云々」を読む―― …… 一三七

『耳』の書物 ――日本書紀の「史」の方法について―― …… 一四五

Ⅴ 秘儀論

「大嘗の祭」祝詞を読む ――スサノオの挫折―― ……一六五

Ⅵ 異類表象論

風土記における異類婚の位相 ――他者としての異類―― ……一九七

Ⅶ シャーマニズム表象論

憑依と神婚 ――異類婚姻譚の発生―― ……二四一

異人の容貌 ……二五八

黄泉（よみ）がえらない景戒の夢 ――『日本霊異記』における生と死の境界―― ……二七四

Ⅷ 文学研究へのまなざし

神話研究史の内部と外部 ……二九三

違和としての古代文学 古橋信孝著『万葉歌の成立』所収・解説 ……三一二

都市へ向かう言葉 書評 古橋信孝著『古代都市の文芸生活』……三二〇

現在としての郊外 書評 古橋信孝著『平安京の都市生活と郊外』……三二三

ハードとしての物語論 書評 三谷邦明著『物語文学の方法Ⅰ・Ⅱ』……三二五

ロゴスはエロス？ エロスはロゴス？ ――『物語文学の方法Ⅰ・Ⅱ』を読む―― ……三三〇

凝集と拡散 ……三四〇

文学研究をやめない理由 ……三四七

物語成立の瞬間に立ち会う 書評 石井正巳著『絵と語りから物語を読む』……三五〇

生活世界の中で生きられている言語行為 書評 藤井貞和著『詩の分析と物語状分析』……三五二

「喰う」ことの精神性 書評 中村生雄著『祭祀と供犠』……三五五

文学・文化をどう語るのか 書評 安田敏朗著『国文学の時空 ――久松潜一と日本文学――』……三六〇

各論文の初出一覧……三六三

あとがき……三六七

呼応する歌
――旅生活における問答歌――

はじめに

古代世界で、なぜ短歌はあのように歌われるのだろうという興味はやはり尽きない。あのようにとは、主に万葉に歌われている世界を指しているが、無論、万葉以前にあるいは万葉の基層に膨大な歌を歌う世界が裾野を広げているということを想定して、万葉の世界と言っている。知りたいのは、その裾野のところで、人々が歌を歌うという行為によって織りなす幻想と生活の古代的なありようである。あるいは、言葉としての歌がそのありようにどんな機能を持ちどんな風に支えそしてどんな様に変えていったかという興味も尽きない。

こういった興味は、近代故のロマンチシズムだと言われそうだが、それはそれでかまわないのだと思う。古代の表現世界を覗くことがある懐かしさといったものを感じさせることは否定できないことだからだ。ただ、古代を覗く際には、その覗きかたによってはどうにでも見えるということがあり、古代を見ているようで自分の観念を見ていたというようなことが多い。古代を通して自分の観念を見ることもとても重要な試みだとは思うが、一方で、共通なコンテクストの上で、古代の表現の異質さにも触れてみたい。これはロマンチシズムとして言っているのではなく、自分の観念を見るという近代以降の言表システムに取り込まれているわれわれが、そのシステムにとらわれない何かを見たいという、願望として言っている。

ここでは旅の歌を扱ってみようと思う。古代社会では、人々は旅の際にたくさんの歌を歌った。旅は、恋と並んで作歌の大きな動機だった。何故、旅の際にたくさん歌を歌うのか。簡単に言えば不安だったからだ。旅をする人々も不安だし、旅に出た夫を待つ妻も不安である。そういう時に万葉人は歌を歌う。その気持ちは現代のわれわれにもよくわかる。それなら現代のわれわれと少しも異質ではないではないか、ということになるが、ある意味ではそうだ。が、現代のわれわれは、近しい存在が旅に出るときに歌を歌うだろうか。そう考えれば、やはりその歌う行為は異質なのではないか。

歌の内容も歌う動機もよくわかるが、歌うか歌わないか、というところにわれわれとの決定的な違いがある。その違いにこだわりながら、旅に際して交わされた問答歌について考察していこうと思う。

一　旅における問答

A　中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子との贈答の歌[1]　（巻15・三七二三）

あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし　（三七二四）
君が行く道のながてを繰り畳ね焼き亡ぼさむ天の火もがも　（三七二五）
わが背子しけだし罷らば白妙の袖を振らさね見つつ思はむ　（三七二六）
この頃は恋ひつつもあらむ玉匣明けてをちより術なかるべし

右の四首は、娘子の別に臨みて作れる歌

塵泥の数にもあらぬわれ故に思ひわぶらむ妹が悲しさ　（三七二七）
あおによし奈良の大路は行きよけどこの山道は行きあしかりけり　（三七二八）
うるはしと吾が思ふ妹を思ひつつ行けばかもとな行きあしかるらむ　（三七二九）
恐みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ　（三七三〇）